

東日本大震災 に学ぶ

平成23年3月11日、日本観測史上最大となるマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。最大震度7という激しい揺れと大津波を起こし、原発事故まで招いた東日本大震災。

この光景は決して人ごとではない。
私たちは、この災害から学ばなければならない。
もう二度と、津波で命が失われないように。

東北地方太平洋沖地震の概要

- 【発生日時】 平成23年3月11日（金）午後2時46分
- 【震源】 三陸沖（牡鹿半島の東南東130km付近）
- 【震源の深さ】 24km
- 【地震の規模】 マグニチュード（M）9.0
- 【最大震度】 震度7 宮城県北部
- 【津波】 3月11日午後2時49分 大津波警報発表
- 【被害状況等】
 - ・人的被害 死者15,824人 行方不明者3,824人 負傷者5,942人
 - ・建築物被害 全壊118,660戸 半壊182,415戸 一部破損603,193戸

※内閣府緊急災害対策本部発表資料（平成23年10月18日）より



足元数十センチまで津波が押し寄せた

早野一弘さん（64）

かずひろ

その時

津波襲来時、三陸沿岸で何が起きたのか。
生き残った人は、どういう行動を取ったのか。
被災者の生の声は、私たちに何を伝えるのか。
岩手県田野畑村で被災した二人の体験談を紹介する。

取材協力 田野畑村政策推進課



DATA【岩手県田野畑村】
面積 156.19 km²、人口 3,883 人（H23 年 10 月 1 日現在）の酪農と水産業の村。観光地「北山崎」は、(株)日本交通公社の全国観光資源評価「自然資源・海岸の部」で国内唯一、最高ランクの特 A 級に格付け。近年、北山崎を中心とした体験型観光にも力を入れている。

津波にのまれ、九死に一生を得た

工藤房子さん（70）

ふさこ



「い

づがは来っと思っ
てだったども、ま
さが、ここまで…」

3月11日は浜のなぎも良く、午前中にシユウリ採り。それを誰に配つかなと考えているときに大っきな地震が来た。何かの下に隠れるよりも、外に出た方が安全だと思って飛び出した。今まで経験したことのない大っきくて長い地震。直感的に「来る！」と確信した。

「逃げるー、もっと上だー」
叫びながら逃げた

揺れが収まり、近所の老人宅や平井賀郵便局を確認したあと、駐在所付近で海を見た。

その時、普段の干潮よりも少し多く潮が引いていった。それから少しずつ満潮のようになり、鳴門海峡のような渦を巻いていた。海面がだんだん高くなり、岸壁のクレーンを押し倒し、船が沈んだりひっくり返ったりするのが見えた。

その波が引かないうちに「ドーン」と第2波が来た。真っ白く上がるしぶきの下から、も

保

健センターで食改善
グループ役員会の最
中に地震が来まし

た。よく覚えていませんが、とにかく大きい揺れで、ストーブを消して慌てて外に逃げたと思います。

地鳴りのようなものが聞こえ、建物は揺れるというよりも横に動いている感じ。今まで感じたことのない地震で、「これはただ事ではない。津波が来る」と思いました。

あんなに大きい津波だとは
想像もしなかった

揺れが少し収まったときに、足が痛くて歩くのが大変な無二の友人が心配になり、車で島越に向かいました。島越に着くと、友人は避難した後でした。安心して、自分も自宅に車を止めて、自宅裏の避難場所に向かいました。津波が来るとは思ったんだけど、まさかあんなに大きなものだとは想像もしていませんでした。

第1波か2波かは分からないけど、すごい勢いで水が増えて

のすごい勢いで津波が押し寄せた。自分がいた場所よりも高く感じ、ここじゃ駄目だと思い、「逃げるー、逃げるー」「駄目だ、もっと上だ、上がれー、上がれー」と叫びながら逃げた。津波の様子をうまく表現することはできないが、例えるなら洪水の濁流が下から上がってくるような感じで、ものすごいスピードだった。

「てんでんこ」を実感した

逃げる途中、家に居たはずの妻や娘、孫のことが脳裏をよぎったが見ている時間などなく、「見でいれねえぞー」と叫びながら坂を駆け上がった。幸い家族も、俺の叫び声を聞いて先に避難していた。

先人たちが伝えてきた「津波でんでんこ※」は、このことだと実感した。

足元から数十センチのところまで津波が押し寄せたが、何とか助かった。その後も津波が何度も押し寄せたが、第2波が一番大っきかったと思う。

「まさかー」と、ほとんどの

きて、「ダーン」とか「ドーン」とか、とにかく大砲のような音が聞こえました。堤防や水門、黎明館（漁村センター）が壊れる音だったんでしょね。そのうち誰かの「上がれー、もっと上さ上がれー」という叫び声が聞こえ、自分ももっと高い所に逃げようと思いました。

その時、自分がいる避難場所に向かう道を二人が上がつてきました。一人は誰だか覚えていませんが、もう一人はつえをついた近所のおばあさん。私はおばあさんと手をつないで必死に逃げました。

間に合いませんでしたー。

二人とも津波にのまれ、水の中でがれきと一緒にぐるぐると回りました。いつ手を離れたのかは覚えていません。水を飲んだら駄目だと思って必死でした。でも、だんだん息が苦しくなり、「あーこれで終わりだな」と思ったときに水がひき、息をすることができました。

それと同時に、今度は大量のがれきが体の上にのしかかってきました。その後、何とかがれきの中から救出してもらい、ア



防波堤を破壊した大津波は、住宅や商店など、街並全てを奪い去っていった

人が話す。でも「まさかと思う油断」はもうやめたいし、皆さんにもやめてほしい。とにかく地震があったら、1分でも1秒でも早く、1メートルでも1センチでも高いところに逃げることに。これが大事だと痛感させられた。

これからの俺にできることは、今回の教訓をうるさいって言われるぐらい教えて行くこと。この経験を風化させないように伝えることが一番大切だと思う。机の上で考えたことや学者の言うことよりも、経験した人じゃないと分からないことがいっぱいあるはずだから。

大切なのは「伝えていくこと」。先人の教えのおかげで、自分も今こうやって生きているんだから。

ズビイホールに避難することができました。皆さんの一丸となった支援に本当に感謝しています。

これからも海と生きて行く

教訓にするには、あまりにも大きすぎる犠牲。それでも生きていかなければならないし、海を捨てるわけにもいきません。

私は漁業をしていないけど、海で育ち、海と暮らしてきました。これからも海と向き合っていかなければならないと思います。今は、何事もなかったかのように寄せては返している静かな海。この海が二度と牙をむく日が来ないことを願いながら、私の経験を後世に伝えていきたいです。



島越地区に襲いかかる大津波。鉄道線路や駅舎を破壊し、集落を壊滅させた

※津波でんでんこ…三陸沿岸に古くから伝わる言葉。一家共倒れを防ぐために、津波が来たら肉親に構わず、各自でんでんばらばらに一人で高台へと逃げろという意味。

釜石の奇跡

震災当日、学校管理下にあった2921人全員の児童・生徒が生き残った岩手県釜石市。それは、8年前から実践してきた「防災教育」の成果だった。釜石市の事例から何を学ぶべきか。市の防災教育に携わってきた群馬大学大学院の片田敏孝教授に話を聞いた。

津波に備えることは、海の近くで暮らす「お作法」

災害に対する一番の危険は、気のゆるみの中にあります。今の釜石市民であれば、地震が発生すれば津波を想定して逃げるでしょう。明治・昭和三陸津波のときも同じだったはずですが、しかし、時間の経過とともに災害の記憶は風化し、気がゆるんだころに再び災害が発生してしまふ。今回の災害は、人間のもろさがそのまま被害に直結したように思います。

津波を恐れながら日々の生活を送る必要はありません。海の恵みをたくさんもらうということは、人間が自然と共に生きて

いるということです。それは、時に起こる海の大きな振る舞いと向き合うべき宿命であり、その時にちゃんとした対応をすることが海の近くで暮らす「お作法」なのです。

私が子どもたちに伝えたのは津波の知識や恐怖ではなく、自分の命を守ることに主体的になること。できうる限りの最善を尽くすという姿勢です。防災教育においては、この「姿勢の教育」こそが最も大切なのです。ハザードマップの津波浸水想定区域外にあった鵜住居うのすまい小学校には、屋上を超えるほどの津波が襲いましたが、子どもたちは状況を判断し、より安全だと思っ場所に避難しました。子どもた



校舎3階に軽自動車突き刺さった鵜住居小学校の様子（片田氏提供）

ちの最善を尽くした行動が、結果として多くの命を救い「釜石の奇跡」と呼ばれるようになったのです。

学校管理下になかった5人が犠牲になり、手放して喜ぶことはできませんが、子どもたちはどれだけ褒めても褒めたりないくらいにすばらしい判断をしてくれました。最善を尽くしても



助かるとは限りません。でも最善を尽くしたのであればしょうがない。最も悔しいことは、まだやれることがあったのに犠牲になってしまったことです。

自分の命を守ることに主体的な姿勢を

能登半島の地形は、決して安心できる地形ではありません。しかも短い時間で津波が来ることも分かっています。今、この状態で津波が来たらどういう対応ができるのか、自分たちの問題として考えるべきです。

これまでの防災に対する考え方を变える必要もあります。大災害が起きた瞬間、行政ができることは限られるからです。

防災は行政だけがやるものではなく、住民の対応力の問題でもあります。津波が来たら行政任せでは絶対に間に合わない。自分で判断して逃げるしかないのです。

だからこそ最善を尽くすという『姿勢』が大切です。自分の命を自分で守るという姿勢。地域の安全を自分たちでつくっていくという姿勢です。

当事者意識を持って考えれ

ば、できることは見えてきます。例えば裏山に上がる避難路を地域でつくる。その避難路でお年寄りや避難できるのか。要援護者をどうやって運ぶのか。それぞれの地域が、地域の問題として真剣に議論しなければなりません。行政は行政としてできることをやりながら、住民を支援していくべきです。

東北の犠牲を無駄にしない

人間は嫌なことを忘れるようになっていきます。特に災害の記憶は風化しやすい。しかし、それではまた災害に対し無防備になってしまいます。無防備な状態で『その時』を迎えるのはもうやめましょう。どの地域も東北と同じ思いをしてほしくない。東北の経験を、教えを無駄にしてほしくないのです。

日ごろからしっかり備えておくことができれば、あれだけの巨大津波でも犠牲者ゼロが不可能ではないことを、釜石の子どもたちが教えてくれました。幸い、まだ能登に津波は来ていません。やるなら今です。今すぐやるしかありません。

釜石東中学校と鵜住居小学校の津波襲来時の対応

地震発生時、釜石東中学校の副校長がハンドマイクで生徒に校庭への避難を呼びかけようとしたがそれは不要だった。

生徒は、地震の揺れから「ただ事」ではないことを察知。各自が揺れから身を守る最善の対応を行い、揺れが収まった後に、自らの判断で校庭に集合し始めた。そして、運動部員を先頭に全生徒があらかじめ決めておいた避難場所「ございしよの里」まで走り始めた。

一方、鵜住居小学校では、津波の襲来に備えて全校児童を校舎の3階に移動させていた。しかし、中学生が避難していく様子を見て、すぐに校外への避難を決断。児童たちは中学生のあとを追って走り始めた。釜石東中学校の生徒は、鵜住居小学校の児童にとって率先避難者となった。

ございしよの里まで走りきった小中学生は、その場で点呼を取り、避難は無事完了したかに見えた。しかし、裏山の崖が崩れていることを発見した生徒は「ここも危険だからもっと高いところに避難しよう」と先生に進言。さらに高台の介護福祉施設までもう一度走り出した。

中学生は訓練どおりに小学生の手を引き、避難を支援した。道中、合流した鵜住居保育園の園児を抱え、台車を押し、「助ける人」としての役割を果たしながら、必死に避難した。

先頭の生徒が介護福祉施設に到着し点呼を取り始めたとき、「津波が堤防を越えた！」という叫び声が聞こえた。

「逃げろー」

襲い来る津波の恐怖に、子どもたちはさらに高台の石材店まで駆け上がった。避難の最後尾は介護福祉施設に着く前に津波に追いつかれてしまふ。とっさの判断で山を駆け上がり、間一髪のところで無事合流することができた。

こうして、津波襲来時に学校管理下にあった鵜住居小学校、釜石東中学校の児童・生徒約570人は、無事津波から生き残ることができた。

（広域首都圏防災研究センターホームページより抜粋）



群馬大学広域首都圏防災研究センター長
群馬大学大学院工学研究科教授
釜石市防災・危機管理アドバイザー

片田敏孝さん

片田教授が釜石市の児童・生徒に伝えてきた【避難三原則】

①想定にとらわれるな

ハザードマップ以上の災害が起こる可能性があると思え。
※浸水想定区域外であったにもかかわらず、それにとらわれることなく避難を行った。

②最善を尽くせ

「ここまでくればもう大丈夫だろう」ではなく、その時できる最善の対応行動を取れ。
※状況から判断し、あらかじめ決めておいた避難所よりもさらに高台を目指した。

③率先避難者たれ

避難する姿を見てほかの人も避難するようになり、結果的に多くの人を救う。
※避難する中学生を見て、小学生は校外へ避難した。

※は震災時に釜石市の児童・生徒がとった行動